

# 経験が ビジネスでも生きる

**送り出す当社も  
協力隊の人材育成に期待**  
(インド事業グループ グループリーダー 金原優二さん)

途上国で困難や逆境に立ち向  
協力隊員たちは創意工夫、行動力、コミ  
協力隊事業には、グローバル  
既存の枠組みにとらわれず、新  
フロンティア人材育成の側面  
“ビジネスに新しい風を吹き込

かい活動する中で視野を広げ、  
ユニケーション力などが鍛えられていく。  
な視点を持つだけでなく、  
しい試みを率先して実践する  
もある。企業は、そうした人物が  
む”として期待をかけている。

過去 コミュニティ開発隊員として  
キルギスへ  
現在 復職後、インド事業管理と中央アジア・  
コーカサス地方の新規ビジネスを開拓

**竹田佳代**(たけだ・かよ)さん  
派遣期間：2014年10月～2016年9月  
学生時代にフィリピンの孤児院を支援するNPO  
でボランティアに参加。リコー入社3年目に、ボラ  
ンティア特別長期休暇制度を利用して青年海外  
協力隊に応募。帰国後は、新興国事業センター  
に配属され、17年からインド事業グループへ。  
「応募時を思い出してひと言!」  
きっかけは 国際協力を挑戦したかった。キャリア  
アチェンジしたかった。  
語学スキルは トルコの大学に留学。トルコ語と  
英語を学びました。  
家族の反応は 「行っといで、僕らも旅行で訪ねる  
から」と応援。



昨年、キルギスには仕事で3度訪れた。写真はウオッカ  
工場の人たちと。



**RICOH**  
imagine. change.  
RICOH(リコー)

世界約200の国と地域にネットワークを持つグローバル  
企業。オフィス向け画像機器、商用・産業用プリン  
ティングなどを手がける。「多様な人材が活躍できる」  
考えのもと、社員一人ひとりが仕事と仕事以外の双方  
をマネジメントしながら、生産性の高い働き方を促す  
環境整備を進めている。

リコーには、会社に在籍したま  
ま JICA 海外協力隊に参加で  
きる「ボランティア特別長期休暇  
制度」がある。営業部で働いて  
いた竹田佳代さんは、この制度を  
使って2014年にキルギスに  
赴任。復職後の現在は本社でイン  
ド事業を担当しながら、中央アジ  
ア・コーカサス地方の新規ビジネ  
ス開拓に取り組んでいる。上司の  
金原優二さんは、社員を協力隊に  
送り出す利点を次のように話す。  
「当社では今後も世界から評価さ  
れる企業であり続けるには  
SDGs(持続可能な開発目標)  
(40ページ参照)に貢献する事業  
への取り組みが重要と考えていま  
す。そのため私たちが求めるの  
は、現場で社会問題を掘り起こす  
ことのできる人材であり、自社の  
技術力とビジネス力を使って事業  
を生み出すことのできる人材です。  
これらは協力隊活動の中で鍛えら  
れる課題解決能力に相通じるとこ

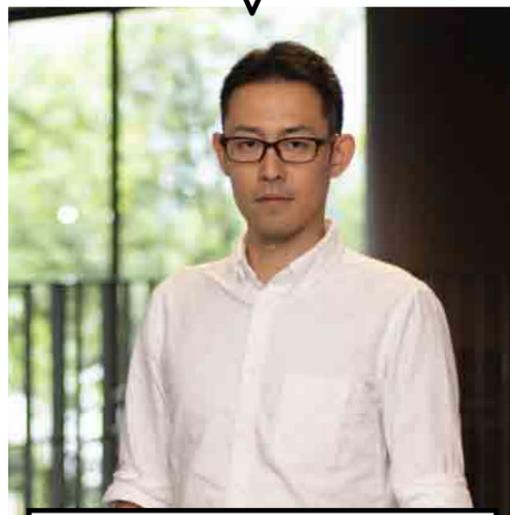
ろがあると思っています」  
竹田さんは会社の適材適所とい  
う方針によって、18年からキルギ  
スでも市場調査を始めている。そ  
こで新たに気づかされることも多  
かった。  
「協力隊時代は、途上国で低所得  
者層に貢献するという先入観から  
か、『国の経済規模も小さいだろ  
う』程度に考えていました。けれ  
どもビジネスの視点で見ると、途  
上国といっても多様な人が暮ら  
し、多様なニーズを秘めていること  
がわかってきたんです」  
たとえば都市部にはレストラン  
が多く、メニューの印刷ニーズは  
想像以上にあった。お祝いの場で  
飲むことの多いウオッカは、毎月  
100種類以上の新製品が発売  
されるため、酒造メーカーはラベ  
ルの印刷経費に悩んでいた。さら  
びやかで美しい絵柄を好む国民性  
から、自社の高い技術を生かせる  
手ごたえも感じたという。  
「長期休暇制度はこれまで約10名  
が利用しました。職場に戻ると生  
活環境が変化しますので大変だと  
は思いますが、協力隊は協力隊、  
仕事は仕事と両者を別ものと分け  
ることなく、協力隊とビジネスの  
双方に精通した強みを生かして、  
自分らしい成果を上げてほしいと  
願っています」と金原さんは竹田  
さんにエールを送る。

メンバーとミーティングを行  
う薬師川さん(写真右)。  
会社には日本人3名とケニ  
ア人14名が在籍する。



過去 マーケティング隊員としてケニアへ  
現在 協力隊時代の赴任地で起業し、  
現在はボーダレスグループの一員に

**グループの一員として  
ともにスピーディで  
インパクトの大きい社会貢献を**  
(ボーダレス・ジャパン副社長 鈴木雅剛さん)



**BORDERLESS**  
BORDERLESS JAPAN  
(ボーダレス・ジャパン)

「数ある社会問題を解決したい」と2007年に創業して事  
業を開始。17年、社会起業家がソーシャルインパクトの創  
出に専念できるプラットフォーム体制を強化するため、それ  
ぞれが独立した法人として自主経営を行うグループ会社制に  
移行。日本をはじめ、ケニア、バングラデシュ、ミャンマーなど  
世界各国で事業を展開する。グアテマラの手織物と刺繍を  
用いた製品を販売する「ILOITOO(イロイト)」もグループの  
一員で、元協力隊員が起業している。

「私たちボーダレス・ジャパンは、  
世界のさまざまな社会問題に対し、  
寄付金や助成金に頼らずソーシヤ  
ルビジネスで解決を図る企業です。  
『いい社会をつくりたい』という  
志のもと、22社の社会起業家たち  
が一つのコミュニティを形成して  
います」と話すのは、同社で副社  
長を務める鈴木雅剛さんだ。  
そして、その中に元協力隊の薬  
師川智子さんが起業した「アル  
ファジリリミテッド」がある。  
2016年2月、薬師川さんは  
ケニアのミゴリ県で任期を終えた  
直後に、同地で小規模農家の経営  
パートナーとして、契約栽培によ

る生産・卸売りのマネジメント事  
業を始めた。起業について彼女は、  
①新しいものを見出すエネルギー、  
②人を巻き込む力、③考えるだけ  
でなく行動する力——この三つが  
あったからできたかと分析する。  
「これらは協力隊時代に誰もが求  
められるもの。実践するうちに、  
自身で道をつくることの楽しさを  
知りました」  
初めてのビジネスに苦労するも、  
農家や販売先と良好な関係を築い  
ていった。しかし、悩みもあった。  
「事業資金は借りることができて  
も、会社の仕組みや組織づくりは  
まだまだ。私の夢はミゴリ県だけ  
の農家を豊かにするのではなく、  
『一刻も早く世界を変える!』と  
もっと大きいものでした」  
起業から約1年半後、現状をよ  
りよく変えるべくボーダレス・

ジャパンのグループに入った。同  
社は資本を100パーセント出  
資するとともに、グループ内の企  
業で共有している人材・資金・経  
営ノウハウを使って各企業のパツ  
クアップを行っている。鈴木さん  
は次のように話す。  
「社会のためにアイデアがあ  
っても世界に広がらなければ意  
味がありません。社会起業家がお  
たがい知見を持ち寄り、その知  
見をグループ全体で生かしてもら  
う——そうした『恩を送る』こ  
とに似たシステムを構築して、社  
会課題を継続的かつスピーディに  
解決するビジネスを目指していま  
す」  
社会を変えようとしているのは  
自分一人ではない。薬師川さんは  
多くの仲間がいることを心強く感  
じ、アフリカの大地で奮闘している。